

「さかえ」連載企画

# 聖アンデレ教会のお宝



旧聖堂のチャンセル（至聖所）の様子



2017年6月

日本聖公会東京教区  
聖アンデレ教会

## 『聖アンデレ教会のお宝』 文集発行にあたり

この度、聖アンデレ教会の教会報『さかえ』に連続掲載されてきた「聖アンデレ教会のお宝紹介」を冊子としてまとめることができましたことを、心から神様に感謝いたします。

この連載は、歴史資料担当者の齊藤美代子さんと片岡仁枝さんが、聖アンデレ教会の風景に溶け込んでいる様々なお宝をひとつひとつクローズアップして紹介して下さったものです。2013年10月から2017年7月号（発行予定）まで毎号欠かさず掲載していただきました。

日頃何気に見ている物の歴史や意味を知ることによって、先達の信仰の情熱を改めて思い起こしたり、歴史の重みや当時の聖アンデレ教会の楽しげな様子を想像してみたりすることができ、古くからいらっしゃる信徒さんにも、また新しく加わってくださる信徒さんにも大変好評の連載でした。

今年に入ったある時、齊藤美代子さんがこの連載を今年の創立記念日に向けてまとめてみてはとご提案くださいました。わたしは少々早いような気がすると思いつつも、何か意味があるようにも思え、賛同しました。歴史資料担当者のお二人に加えて、小冊子として発行する作業に鈴木幸夫さんがご協力くださることとなり、構成や写真の掲載方法などが話し合わせ、発行に向けて準備が順調に進んでいました。

ところが、復活前主日の礼拝準備中、齊藤美代子さんがくも膜下出血のために礼拝堂で倒れられ、手術や治療、そしてご家族の献身的な看病と信仰の友人たちの篤い祈りにも関わらず、一ヶ月後の5月10日に神様のみ許へ旅立ってゆかれました。それはあまりにも突然のことで、受け入れることは非常に困難なことでした。

だからこそ、敬愛するルツ齊藤美代子さんが具体的に思い描いていた、この冊子の発行完成に向かうことで、姉妹との関係を確認していきたいとの願いを込めて、創立記念日の発行を迎えることとなりました。

日頃の風景の中にこそ、わたしたちの「宝」が隠れていることを教えて下さったルツ齊藤美代子さんに、感謝を込めてこの冊子をお届けいたします。

2017年6月創立記念日

牧師 司祭マリア・グレイス笹森田鶴

## 目次

序文『聖アンデレ教会のお宝』文集発行にあたり

目次

聖堂編	1P
(1) 聖堂の鐘	1P
(2) アレクサンダー・クロフト・ショウ師のエッチング像	2P
(3) 聖卓	3P
(4) こどもと祝うユーカリストの聖卓	3P
(5) 主教座背もたれの刻印	4P
(6) ベストリーの祈り場	4P
(7) ハモンドオルガン	5P
(8) 2台のグランドピアノ	5P
祭具・礼拝用具編	6P
(9) パテン、チャリス	6P
(10) 里帰りした病者訪問用聖餐式用具	7P
(11) 十字架と6本の燭台、行列用十字架	8P
(12) バナー	9P
(13) アザラシの皮のニーラー	10P
絵画・美術品編	11P
(14) 月約献金の絵	11P
(15) 使徒聖マタイ像の版画図	11P
(16) 聖アンデレホールのアンドレ像	12P
歴史編	13P
(17) アレクサンダー・クロフト・ショウ師への感謝状	13P
庭編	15P
(18) 創立以来から教会を見守っていた門柱のその後	15P
(19) 4本の桜	16P
(20) 出迎えの石	17P

齊藤美代子さん、ありがとうございました。



撮りためた記録写真の中から齊藤美代子さんの写真を探した。なかなかよいものがみつからない。齊藤さんは常に後ろから支えるように存在し、そこが大丈夫と見るや別の場所へ移動して気遣い、手を休めずに働かれておられたからだ。見つけた写真は、誰かに語り掛けているもの、一心に手を動かされているもの、遠くから周囲を見守られているもの、ご自身でカメラを構えているもの、などなど。でもポイントがあつていなかったり、遠すぎたり。そんな数少ないスナップから掲載させていただきました。齊藤さん、本当にありがとうございました。

(編集者)

< 冊子の編集にあたり >

さかえ掲載時の本文・文体を尊重しつつ、記事の正確さを保つために本文の必要最小限の修正や補足を行ないました。写真も冊子向けに何点かは撮影し直し、また画像を修正しました。なお「(17)アレクサンダー・クロフト・ショウ師への感謝状」は感謝状本文の全訳版をさかえ349号(2016年6月発行)の別刷付録として発行しています。

(編集者)

(1) 聖堂の鐘

毎日の礼拝の時、幸せ一杯の結婚式のウェディングベル、そして天国にお送りするとき、鐘の音が飯倉の丘の上で鳴り響きます。

今の鐘は二代目です。小林善彦兄によると、初めの鐘は1892年（明治25年）英国より贈られた「チューブラー・ベル」といい、外国の方々のための礼拝堂の横に立てられた鐘楼から、「ドシラソファミレド」と5回美しい音色で奏でられ、最後は低い「ド」の音が5回鳴ったそうです。クリスマスには当教会員の岩田健夫兄が「きよしこの夜」を奏でられたそうです（右ページの挿絵は小林兄による最初の鐘楼）。

島崎藤村の随筆「飯倉付近」には「聖アンドリウス教会は『ハイ・チャーチ』と称える英国派の教会です。（中略）日曜の朝夕に鳴らす此の教会の鐘の音もいいと思います。あの鐘は実に複雑な音階の、美しい響を町の空に伝えます。」と、初代の鐘のことが描かれています。

この鐘楼は残念ながら1945年（昭和20年）、戦災で焼けてしまいました。その後、教会委員の梶原磯江兄が、原宿にあった「海軍館」がGHQの命令で解体され備品が競売されるということを知り、何か聖堂に役立つものがあればと探しに行かれ、信濃丸の鐘を見つけて購入し、教会に寄附されたのが、現在の鐘です。（梶原磯江追悼集より）

これら諸先輩のご苦労には頭が下がります。123年の間、戦後の何年かを除いて、鳴らされている事に感謝の思いを新たにしました。

（第10回 343号：2015年5月発行）



小林善彦兄の画集「懐かしき聖アンデレ教会（思い出スケッチ）」より、初代鐘楼とベル引手図



〈現聖堂の鐘〉

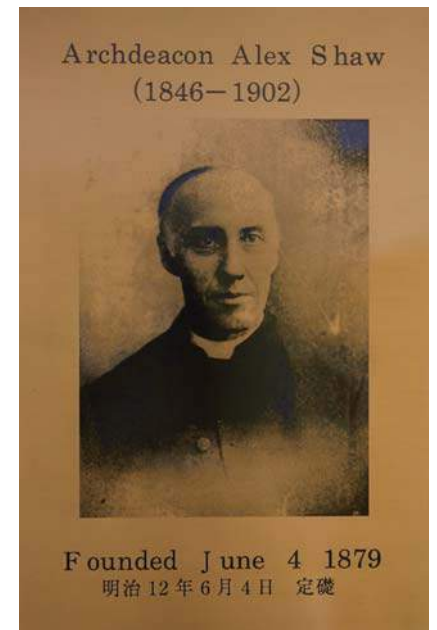
日本郵船の貨客船で日露戦争で有名な「信濃丸」の鐘であることが確認されている。

(2) アレクサンダー・クロフト・ショウ師のエッチング像

聖堂に入ると左側壁面にあるショウ師像が刻まれたエッチングの真鍮板に気付かれると思います。聖アンデレ教会は1879年（明治12年）6月4日、英国のSPGから派遣された宣教師ショウ師によって建立（定礎）されました。

ショウ師の写真や関係資料は、信徒の故関屋友彦さんが英国やカナダに長期間滞在し収集。120周年記念事業の一環として、定礎のしるしとして関屋氏が収集した肖像写真をもとにエッチングを作成し、ショウ師没後100年となる2002年に、現在の聖堂に掲示しました。

真鍮板は加賀藩高岡の鋳物師により作成され、エッチングに着色加工されたものです。



（2017年7月発行予定の354号に掲載予定）



### (3) 聖卓

聖堂左側に置かれている聖卓は、戦災で焼失した後、聖堂再建の折、英本国の旧英人会衆の方々が募金して贈られたものです。1950年（昭和25年）、当教会員の故安形恵喜助氏とご子息譲治氏の工房で制作してくださいました。正面に置かれておりましたが、対面礼拝になった聖餐式で使用するため聖卓を新調し、この聖卓は現在は聖堂の左壁面に置かれ、十字架と6本の燭台、タバナクル（ご聖体を収納するシボリウムを保管する聖櫃）が置かれています。



(第2回 335号：2013年12月発行)

### (4) こどもと祝うユーカリストの聖卓

仙台キリスト教会で震災に遭うまで礼拝で使われていた communion・レール（陪餐の時にひざまずくために設置されている横木）の真中の聖扉を利用して、米沢聖ヨハネ教会の小貫様が制作し、お送りくださったものです。小貫様は笹森先生の「こどもと祝うユーカリスト用の聖卓がないかなあ」というつぶやきを覚えていただき、天板を仕入れ、高さを調節し、塗り直しをして、立派な聖卓に仕立ててくださいました。足の部分の彫刻は「キー・ロー」と呼ばれる十字架です。一度是非ご覧ください。



(第3回 336号：2014年2月発行)

### (5) 主教座背もたれの刻印

主教座の背もたれには刻印が押されており、この刻印は初代東京教区主教ビカステス主教の刻印です。主教座にはその教区初代主教の刻印を押す習慣があります。お時間のある時、一度ご覧ください。

(第1回 334号：2013年10月発行)



### (6) ベストリーの祈り場

聖卓に向かって右の扉を開けるとベストリーになります。入ってすぐ左に祈りの場が作られています。渡辺禎雄画伯の「型絵染版画」の聖画が飾られています。これは、聖アンデレ教会の元信徒さんから笹森先生が頂いたものです。そしてその前に小さな祭壇が作られており、静かな祈りのひと時を過ごすことができます。

また、ご遺体をお預かりした際は、ここに安置されます。ご遺族の方は何時でも入ってお祈りできます。

(第16回 350号：2016年10月発行)



## (7) ハモンドオルガン

今回は、現在聖卓に向かって左側に置かれているハモンドオルガンをご紹介します。旧聖堂にパイプオルガンが入るまでは、礼拝の度に重みのある独特の音色を奏でていました。現在も、月に一度は皆さまの耳に響いていると思います。丁寧な調律を時々して保っています。型はC-3。1974年（昭和49年）10月に購入しています。

価格は本体が190万円、キャビネット（レスリースピーカ）38万円、税金（関税）12万円で、購入価格は割引もあり約210万円でした。

（第18回 352号：2017年2月発行）



左がハモンドオルガン、  
右がレスリースピーカ

ハモンドオルガンは、教会だけでなくポピュラー音楽の世界でも重用された。購入された1974年に生産が終了したが、真空管を使用した独特の音色には、いまだ根強い人気がある。

## (8) 2台のグランドピアノ

今回は教会の2台のグランドピアノを紹介いたします。今、礼拝堂に置かれているピアノは、以前はホールに置かれていました。購入の経緯は「教会に是非、グランドピアノ」をとということが教会委員会で決まり、1983年（昭和58年）から皆様の献金50万円、個人感謝献金30万円を集め、備品用積立金より93万5千円を支出し、1984年12月に購入・搬入されました。機種はヤマハのC3シリーズです。

その後2004年、当時の牧師であった大畑主教がこのピアノを聖堂に

移しましたが、「ホールにもグランドピアノを」という願いを「さかえ」に載せました。すると、信徒の方から匿名で献品をいただいたのが現在ホールに置かれているディアパソン社のピアノです。

（第19回 353号：2017年5月発行）



左が礼拝堂のヤマハC3シリーズ。右が献品されたアンデレホールのディアパソンピアノ。いずれも礼拝中の奏楽やコンサート、ホールでの誕生日祝いや催し物などで大活躍しています。このほか、ショウホールにアップライトピアノが1台設置されています。

## ————— 祭具・礼拝用具編 —————

## (9) パテン(聖皿) チャリス(聖杯)

今回は毎日聖餐式で使われているパテンとチャリスをご紹介します。写真のパテンとチャリスは1942年（昭和17年）2月、オルガさんのメモリアルとして頂いた品です。（チャリスの下部に記されています）

以来、75年近く聖餐式で使われてきました。戦災にあった折しも聖職方が必死な思いで運び出してくださいました。年月を感じさせない重みを感じさせます。それはその時代、その時代のオルター奉仕の方々が丁寧に手入れをしてくださった賜物だと思います。もし、お近くでご覧になりたい方は、オルター・ギルドの方か歴史資料担当者にお申し出ください。

（第17回 351号：2016年11月発行）





歴代牧師が戦前から守り続けたチャリスとパテン。チャリスの下部には、写真のようにオルガさんを記念する銘が刻まれています。

#### (10) 里帰りした病者訪問用聖餐式用具

2012年、京都のウィリアムス神学館館長の吉田雅人司祭が英国カンタベリー大聖堂より病者訪問用聖餐式用具をお届けくださいました。

なんと、1911年、今から103年前に英国から派遣されたウォルター・グレデリック・フランク執事（のち、逗子聖ペテロ教会牧師）の司祭按手の折、聖アンデレ教会からお祝いに贈った純銀製の一式でした。

ご遺族もいないとのこと、贈ってくださった所へお返ししたいとのことでお届けくださいました。磨きなおし、大切に保管しております。ご覧になりたい方は、笹森先生にお申し出ください。



(第5回 338号：2014年7月発行)



聖アンデレ教会から1911年聖トマスの日に寄贈されたことが刻まれている

#### (11) 十字架と6本の燭台、行列用十字架

今回は現在聖堂の左側の聖卓上の十字架と6本の燭台、行列用十字架をご紹介します。1950年（昭和25年）、前の聖堂の献堂式に際して、当教会員で彫金家の大野吉太郎兄が制作・献納してくださったものです。

行列用十字架は、今も礼拝の折、プロセッションの先頭を進んでいます。ただ残念な事に、6本の燭台中5本が1952年8月23日に消えてなくなっていたそうです。けれど原作者の大野吉太郎兄のご好意で、同じ物が10月5日の主日に再び備えられた由。感謝の思いで常に磨き保存していかなければと思います。

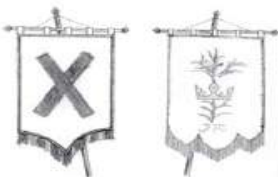
(第6回 339号：2014年9月発行)



## (12) バナー

今回は、常に聖壇の上に飾られており、大礼拝の時には信徒に掲げられプロセッションに用いられるバナーについてご紹介します。

2001年（平成11年）4月の教会委員会で、当時のバナーはあまりにも痛みがひどかったため、教区フェスティバルのために新調することを決めました。同年5月、当時の牧師竹内謙太郎先生より英国リッケル社に問い合わせをしていただき、7月同社より図柄と見積り、生地見本がきましたので、検討の上、使徒聖アンデレの顔をなるべく若い顔になるように要望し、発注しました。なお、戦前には二基のバナーがありましたが、残念ながら震災で焼けてしまいました。



(第13回 346号：2015年11月発行)

戦前のバナー（本文中：図は小林善彦兄の画集より）と現在のバナー（左）、当初のバナー図案（下）



二〇一三年の創立記念礼拝でのプロセッ  
ションの様子。サリファア（香奉持者）、  
バナー、十字架、トーチ、ブレット、ク  
ルエツツの奉持者が続く。

## (13) アザラシの皮のニーラー

今、皆様の目にはあまり触れられていないかも知れませんが、堅信式、結婚式の折り、聖卓の前でひざまずく際に使われているものです。

もともと聖アンデレ教会にあったものと思っておりましたが、ある時その経緯が分かりました。小笠原忍先生の「懐かしい！ここで使われていたのですね」の言葉で色々調べたところ、イヌイットの方が作ってくださったアザラシの皮のニーラー3枚を、1977年にアメリカ聖公会アラスカ教区が後藤真主教に贈ってくださったものだったそうです。

(竹内謙太郎先生談)

大事に使わせていただきます。ご希望の方にはお見せします。

(第4回 337号：2014年6月発行)





(14) 月約献金袋の絵

今回は毎月手にとる月約献金袋の絵の由来をご紹介します。現在用いられている献金袋は1970年（昭和45年）10月の教会委員会で新しい献金袋のデザインとして了承され、作られました。教会員で教会委員も務められた画家の和田平三郎兄がデザインされたものです。



献金の意義をマルコ福音書12章41節、ルカ福音書21章1節に書かれている「やもめの献金」から選び描かれた絵です。このことは和田兄が何人かの方に話されたとも伺っております。皆様も、説教の折り、又勉強の時何となく聞いていた話だと思います。改めてもう一度福音書を開いてみたいと思います。

なおホールに飾られている「ノアの洪水」と、その横の側面にある小さなマリア像の絵も和田兄の作品です。

(第11回 344号：2015年7月発行)

(15) 使徒聖マタイの版画図

聖アンデレホールの奥に飾られている「使徒聖マタイの版画図」をご存知でしょうか。教会の信徒でもある小泉家のご親戚の方が、版画家の棟方志功さんと大変親しくされており、この作品をいただいたそうです。小泉家では、掛け軸として飾っていたそうです。ある時、聖アンデレ教会の牧師で後に横浜教区主教になられた野瀬秀敏師にお見せした折、この作品が「聖マタイ」の版画であることを教えられたため、「個人の家よりは教会に置いてこそ意義があるのでは」とお考えになり、聖アンデレ教会に40年程前に寄贈されたそうです。長い間、掛け軸の状態のまま保管されていましたが、12～13年程前に額装し、飾ることになりました。大変珍しい「聖マタイ」の版画図です。制作：1957年（昭和32年）1月5日。

(第12回 345号：2015年10月発行)

(16) 聖アンデレホールのアンデレ像

今、聖アンデレホールの入り口で皆さんを迎え見守っているアンデレ像。これはホールの設計者長島孝一先生が、懇意にしておられた彫刻家の舟越桂先生に依頼し作っていただいたものです。そしてその時の牧師であった今井丞治先生に1983年、記念として贈られました。

以前はホールの奥に、祈りの場として飾られていました。舟越先生も時々来られ、時には奥様も一諸にお見えになり黙想をしておられた由。教会の大切な宝物として大事にしていきたいと思ひます。

(第8回 341号：2015年2月発行)



右は舟越桂の木彫像「聖アンデレ像」  
左は棟方志功の「使徒聖マタイ版画図」

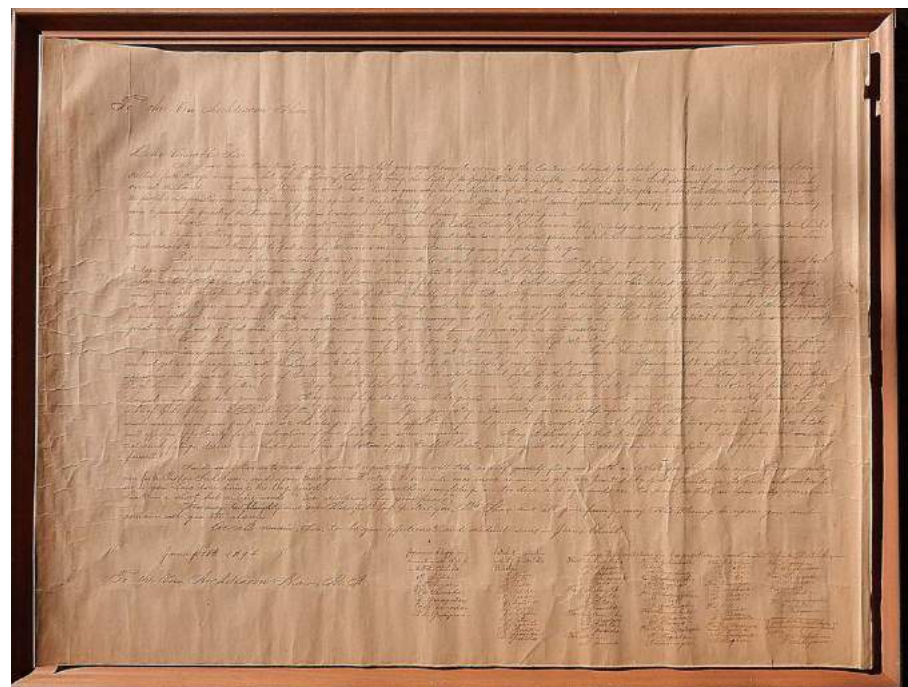
(17) アレクサンダー・クロフト・ショウ師への感謝状

今回は礼拝堂の隣のショウホールに飾られている当教会創立の祖アレクサンダー・クロフト・ショウ師が一時帰国の折、教会より差し上げた感謝の手紙について紹介したいと思います。

1893年（明治26年）11月、飯倉坂をご夫妻で歩いている時、外国人嫌いの暴漢にショウ師が殴打される事件があり、それとご子息の教育の為とご自身の喘息の病もあり翌1894年（明治27年）2月長期休暇をとり帰国されました。その際、聖職者、聖アンデレ教会、聖ステパノ教会、聖十字教会、そして青年会の有志の方々がショウ師の為に書かれた書状です。

「ご自身の故郷から離れ、この東の島に来られてから20年以上が経過しました。見ぬ地でありながらキリストの愛によりその興味と熱意を持たれ、この島を覆う罪と神を知らない闇に光を与え広めるべく、福音の光をもたらされました」と始まり、気候や習慣の違い、考え方など困難のある中、この国の同胞に絶え間ないエネルギーと深い愛を注がれ、暑い夏や凍る冬にも神のみ国の福音を町や村で宣べ伝えられたことを感謝し、またこの20年の間、洗礼を授けるのみならず、多数の聖職者・伝道師という奉仕者を輩出されたことは大変名誉なこと、またショウ師が横浜に着かれた時には知る者もなく、口にされた言葉（英語）を分かる者がなかったのが、20年後には複数の聖職者や伝道師が生まれ、敬愛なる霊的神父としての尊敬、慕う思いを、滔々と書き連ねています。

健康が障害され帰国を余儀なくされるショウ師に対し、「神父さまの幸福と癒しに影響を及ぼしたことを嘆き悲しんでおりますが、神父さまが旅立たれその旅路が神父さまの健康をある程度でも回復に向かわれることを望まずにはられません。どうか神様が共におられますように！」と言葉を送りつつ、「どうか、東の地（日本）にある神の収穫に奉仕することを、他のどなたかがお申し出になることがありませんように」また「平に私たちの真摯な思いをお別れの言葉としてお受けください。最後に、どうぞご自愛くださいますよう懇望いたします



すと共に、日本聖公会の同胞が神のみ業がお許しになられれば、また再びここにお戻りいただきますことを切に懇請申し上げる次第です。」と結んでいます。

連名者として、SPG東京地方区聖職者は飯田、今井、島田、山縣、山田、吉沢、SPG東京地方区伝道師は藤井、後藤、飯田、石田、海宝、牧野、森、佐竹、佐藤、田口、湯沢、山田、吉田（敬称略）が、またSPG東京地方区信徒代議員として以下の16教会、聖アンデレ、聖ステファン、聖十字、布施、聖昇天、希望、横浜聖アンデレ、下福田、松崎聖パウロ、沼津、伊東、小野・檜沢、大宮、静岡、乾、秦野町と聖アンデレ青年会代議員も含まれています。

そして2年後の1896年（明治29年）ショウ師は再来日されました。

差し上げたはずの手紙が何故聖アンデレ教会にあるのでしょうか？それは、軽井沢町がショウ師が滞在され100年を迎えた1986年（昭和61年）、保健休養地100年式典を催した際、カナダ、イギリス在住のショウ師の孫娘お二人を招かれました。その折、聖アンデレ教会へもお越しに



なり、当時の牧師高島司祭、前牧師今井司祭、信徒の関屋兄が同席された場で教会にいただきました。自分たちの所に置くよりは、この際お返ししたいとのことからでした。

それを額に収め、ショウ師の名をつけたショウホールに写真と共に飾っています。又来日時お二人のお孫さんは青山墓地に行かれショウ師ご夫妻のお墓に花を手向けられました。是非ご覧ください。

この度は白井堯子著「福沢諭吉と宣教師たち」、関屋友彦兄著「宣教師A. C. ショウの足跡」を参照させていただきました。また、高島司祭、今井司祭、軽井沢町教育委員会の方々からお話を伺いました。そして上記の抄訳は聖オルバン教会の塚田央子さんにご協力いただきました。感謝します。

(第14回 347号：2016年2月発行)

## 庭 編

(18) 創立以来から教会を見守っていた門柱のその後

創立以来、1894年（明治27年）の市川葛飾地震で倒壊した聖堂や戦災で焼けてしまった仮大聖堂と小聖堂をじっと見つめていた門柱は、1996年（平成8年）現在の聖堂が建築された折り取り除かれました。

しばらく庭に置かれておりましたが、大畑主教が牧師でいらした時「このまま放置しておくのはどうか？」というお考えで、正門から正面突き当たりの築山の花壇の土留めに、また台所入り口への通路の脇に横たわり、そっと皆さまを見守っています。



どうぞ、たまに目を留めていただきたいと思います。

(第15回 348号：2016年3月発行)

(19) 4本の桜

毎年春になると、どこかへ行かなくても教会の中でお花見が出来ます。4本の桜が毎年イースター前後に見事な花を咲かせ、皆様を楽しませくれるからです。

教会は戦災で焼け野原になり、少しずつ植樹して庭の緑を増やしていきましたが、なかなか整備は行き届きませんでした。

この桜の木たちは植物学者の牧野富太郎博士の許でお仕事をしていただいた信徒の坂古東（ばん こと）さん（父君も植物学者）が京都へ丈夫な桜の苗を注文され、植えて下さったそうです。植樹の時期は不明ですが、今井直道先生が牧師だった1955年（昭和30）年～60年（同35年）の間であったようです。或る樹は虫に蝕まれ、或る樹は隣地へ伸びた枝を切られ、また雪の重み、雷雨に打たれた枝が折れるなどしても立ち直り、毎年見事な花を咲かせています。どうか4月5日のイースターには、満開の桜になりますことを願います。

(第9回 342号：2015年3月発行)



## (20) 出迎えの石

皆様、教会の門を入られて右前方に写真の石が建てられているのをご存知でしょうか。これは前の聖堂が建てられた折、お祝いに近所の方がくださったそうです（岩田健夫兄談、教会委員会記録にもあり）。

ただ、どの様な石か判らないまま、バザーの時など植木を置いたり、たまには腰掛けた時もあったそうです。

ある日造園業の方が見て、これは「出迎えの石」といって茶室の前に置き、客を迎える意味の石ですと言われ、あわてて現在の場所に移したそうです（中川原毅兄談）。

どうぞ礼拝にいらした折、御留意ください。教会が皆様を出迎えてくださいます。

（第7回 337号：2014年6月）



## 「聖アンデレ教会のお宝」文集

発行人：牧師 司祭マリア・グレイス笹森田鶴

執筆者：齊藤美代子、片岡仁枝

編集人：鈴木幸夫

編集協力：片岡仁枝、佐藤三重子

発行日：2017年6月4日

発行元：日本聖公会東京教区聖アンデレ教会